

みんな生きるために必死なんだ

昔のように遊んでばかりいたら干上がってしまう時代。生き延びる策を弄する余り、他者を傷つけ、落とし込めてしまったり、前途を悲観して心を病んでしまったり、目を覆いたくなるような地獄絵が広がっているこの時代。押し寄せる情報に自分の道さえ失いかけてしまう。

若い頃のように勢いのなくなった身には、いささかきつい時代です。

みなさまはどのようにこの時代に対処され、生きてらっしゃるのでしょうか？

みなさまの声を聞くことも、顔を見ることもなくこの孤独（もはや孤高なんてものじゃない）にどこまで耐えられるか、ちょっと心細い月田の昨日、今日、明日です。

そんな月田に、久しぶりに熱い想いを抱かせてくれたファドがある。現在ポルトガルのみならず世界的にも、アマリアを凌ぐほどの人気を博しているマリーザが独特のフィーリングで歌っている新しいファドだ。アマリア・ロドリゲスが晩年に書いた詩が素晴らしい。私にとっての故郷はポルトガルではないが、日本であり、アジアであり、この地球でもある。

「ああ、わが故郷の人々よ。今ようやく私にわかったのです。この私が抱いている悲しみは、あなたから受け継いだものだということ。このファドは、あなたと私のもの。私たちをつなぐ運命。どうあらがっても一本のギターラに張られた弦のようなもの。ギターラの奏でる悲しげな音を聞かされた時に、ただただ泣きたい思いが胸に満ちてくる。その音に身をゆだねているうちに、やさしさに包まれてゆくのを感ずるのです。苦しみが大きければ大きいほど、歌うほどに悲しみはうすらいでゆくのです。」

（アマリア・ロドリゲス詩『わが故郷の人々よ』より）

八月はさんりんぼう

＜その一＞まぼろしのポルトガルライブ

6月の梅雨のうっとおしさを吹き払うような嬉しいメールが舞い込んできた。

8月、ポルトガルシントラ市で開催される日本伝統文化国際交流協会の展示会に併せて開催される日葡国交樹立150周年歓迎イベントのレセプションでファドを歌ってほしいという。ただし、予算がなく、ノーギャラ、旅費も半分は月田負担で、という条件にもかかわらず、私は、その仕事を受けることにした。そういうイベントとは極力無縁でありたいと思っていた月田でありながら！そういうことでもないと思っていた月田でありながら！そうもなかったからだ。早速3年近くご無沙汰しているポルトガルの友人たちに「嬉しいお知らせメール」を送った。

「できれば、月田さんのファンの方々にもツアーに参加いただけるようお口添えを」ということで、ファンの方々にお誘いのDMやメールを出した。余りにも急で、しかも高額なお盆料金、ファンの参加希望者は一人もいなかった。その結果！「月田さんのファンの方の参加もないし、経費(ギタリストのギャラ)もかかることですし、今回のファドライブはとりやめにしたい」とのメール。私の仕事はお流れとなった。と思いきや、「シントラ市の主催をとりつけ、ファドライブは実現させたい」との電話。そうであればと、気を取り直し、アルファマの Mesa de Frades のオーナーにギタリストの手配を頼んだ。彼は、僕が弾くよと、喜んで引き受けてくれた。しかし、その後送られてきた航空運賃の請求額にびっくり。ちなみにとHISで安い便をさがすと21万で行ける便があった。半額先方負担だとすると10万そこそこで行ける。ところが、それはできないという。話を聞いているうちに、先方が押さえたツアーの定員割れができて、その穴埋めに月田及び月田のファンに白羽の矢がたったという図式が

見えてきた。その上、私からもしっかりと旅費をとろうとする魂胆が気に入らなかった。「今回のライブはやめましょう。」私の方から、ポルトガル行きを辞退させていただいた。

ポルトガルで会う約束をしていたギタリスト、友人たちに「残念なお知らせメール」を送り、ポルトガルでのライブは、真夏の暑い太陽に溶けて消えていった。

<その二>ポルトガル海軍練習帆船「サグレス号」船上

はちゃめちゃライブ

7月、ポルトガル貿易観光振興庁から8月に横浜寄港予定の「サグレス号」のレセプションでファドを歌ってほしいとの電話をいただいた。予算がないとのことで、私のギャラはなし、ギタリストも最低のギャラで、私は、「喜んで！」受けさせていただいた。

サグレス号の元艦長夫妻は、1985年に初めてポルトガルを訪れたとき以来の友達だ。しかもゴウヴェイヤー夫人は、帰国後、ポルトガルギターを送ってくれた。私の大のファン氏が夫人に送ってもらうように頼んでくれたものだ。そのポルトガルギターの梱包をほどきケースを開け、腕に抱きしめたとき、私の運命は大きく変わった。「ファドを歌っておくれよ」ポルトガルギターが私に熱く囁いたのだ。

それからそのポルトガルギターを抱えて、大阪中の楽器屋を、弾き手を求めて訪ね歩いた。そのうちの一軒の楽器屋からの電話ですっ飛んで行った。そこで、初代ギタリストとなるY君と出会った。まだ20代後半の彼に半ば強引にポルトガルギターを握らせ、その年の暮れのサンケイホールでのコンサートに、ファドの伴奏者として登場してもらった。まだ弦のチューニングさえわからない状態だった。今から考えると恐ろしいほど無茶苦茶なやり方だ。そのコンサートを終え翌年の秋に、Y君と私はリスボンの半分地下にあるアパートの住人となった。Y君は、ゴウヴェイヤー夫人が見つけてきてくれたポルトガルギターのレッスンに、私はリスボン大学のポルトガル語講座に日参した。ゴウヴェイヤー夫人との英語での会話がポルトガル語になり、「Bacalhau de Molho(現在では Casa de Linhares)」というファドの店の前身「Tia Ló」で初めてファドを歌ったり、やみくもにファドの道を走りだした36歳の秋のことだった。Y君がその頃抱えていたのが、私をファドへと誘惑したポルトガルギターだった。アマリア・ロドリゲスのサインの入ったそのポルトガルギターは今では数少ない私の宝物である。

そんなわけで、私にとって、ファドを歌うきっかけをつくってくれたサグレス号の船上で歌うことは夢のようなことで、恩返しのつもりで仕事を受けた。ゴウヴェイヤー夫妻も喜んでくれた。しかし、惨めな結果が私たちミュージシャンを待ち受けていた。レセプションの具体的な段取りもつかないまま、招待状が、参加希望者の手元に着いたのが、レセプション前日。いざレセプションが始まり、予定時刻を過ぎても出番が来ない。予定を一時間ほど過ぎたところで、急きょキャビンではなくモーターの音もやかましいデッキで歌うことになった。いくら声をはりあげたってモーターの音にかき消される。私は仕方なくMC用のマイクをとりあげ「懐かしのリスボン」を歌い始めた。今回のレセプションのスポンサーの社長夫人がファドが好きらしく、一緒に腕を組んで歌ってもらった。「アルファマ」の後には、「リスボンのにおい」。かけつけてくれた私のファンも、居合わせたポルトガルの水夫たちも腰でリズムをとりながら一緒に歌ってくれた。おかげでその場は一応大いに盛り上がった。ここが退けどきとばかり、ギタリストを紹介してファドのライブを終えた。担当者は「もう終わり？」ときよんとした顔で聞いてきた。「もう下船の時間でしょ。」私はもうそれ以上歌う気力を失くしていた。是非、船上で歌いたいと思っていた「ポルトガルのファド」を歌うどころではなかった。私の思惑は見事に外れ、夜の海の底へ沈んでいった。私の気分は「難船」だった。

<その三>ああ、無情“サウダーデの夜”

マヌエル・カーザ・デ・ファドでの「サウダーデの夜」ライブは8月で80回目を迎えた。開店して以来足かけ7年。肩ひもなしの黒のシルクの衣装でぼっちり決めようと思った。

なのに、なんと！新宿で降りた小田急の電車の網棚に衣装を置き忘れてしまった。気がついた時はすでに遅し、その車両は一路「海老名」へと向かっていた。どうあがいてもライブには間に合わない。幸い、その日はGパンではなく、そこそこの服装だった。その格好で歌うことになった。80回記念の特別企画でもあるのかな？と前回聴きに来てくれたビルのオーナー氏に尋ねられたけど、なんとも無様な普段着による特別ライブになってしまった。初めての女性客曰く、「あなたには黒のドレスがよく似合うと思うわ。今度はその姿を見に来るわね。」衣装もチャージのうちなのね。それにしても忘れっぽくなったの暑さのせいだけじゃないような気がする。気をつけませう。

〈其の姿〉

Sixty and Beyond

jfm(住所不定)

ファド倶楽部ジャーナル還暦特集号の書込みを掲示板で拝見した。会報等受け取れない状況なので、倶楽部に問い合わせたところ、お書きになりますかと言って頂いた。会員（それも幽霊）になって三年そこそこの浅い付き合いで、しかも物書きでもない工学人間が紙面を汚すのも憚られると認識しつつも、冷めやらぬファド熱を何方かと共有出来ればと筆(キーボード)を執らせて頂いた。

六十と聞くと少ないようで、実は大変な数だと思う。小学生の頃、擦り減るほど繰り返した“暗いはしけ”と”孤独“のドーナツ盤ですら還暦にはまだ五年ある。1996年の映画『真実の行方』のバックに流れた“海の唄”で、刷り込まれたファドの記憶が長い冬眠から蘇った。以来、ファドに惹きこまれ、ニューヨーク地区と東京で見つけたファドのCDを悉く手に入れ、アマリアの曲は全部聴いたと思っていた。

2002年、念願叶い訪れたリシュボアで、それまでファドと思っていたものは、氷山のほんの一角だったと気付いた。所狭しと並ぶファドのCD群、はしごをしたカザ・デ・ファドで次から次に現れる玉石混交のファディスタ達、ライブでこそ琴線に触れるギターラ、に圧倒された。大量のCDと観光客向けポルトガルギターをアメリカニュージャージー州の家に持ち帰ったが、残念ながらポルギは埃をかぶったままである。

住所不定無職を始めた2004年、日本人ファディスタがいると聞き、四谷を訪れた。実はその前年、ある歌い手の日本語でのファド曲を聴き、歌は上手く、ピアノ伴奏は絶妙だったが、ファド“まがい”だと失望した経験があるので、そのときも日本人には無理だろうと期待せず、ポルトガル料理目当てに行った。

マヌエルは、どことなくリシュボアのカザ・デ・ファドを彷彿とさせるしつらえで、テーブルには親切にも(きっと倶楽部の会員が書かれたのであろう)“月田秀子を聴く心得”なるリーフレットが置いてあった。「もし、座っている椅子の背に秀子の手がかかっても、たまたまそういう席にいるだけなのだからどぎまぎし

てはいけない…」等々。まさしく、そういう状況になっただが、事前に読んでいたお陰で平静を保てた。

歌いながら背後を通り、漸く正面を向き、ギタリストの間に立った姿を見て、嗚呼、この人にはファドに必要な全てがあると感じた。鮮烈な驚きであった。時々ご自身は、ポルトガル語の発音は…、音はずすし…、など仰る。でもこれは、ファドか“まがい”かには関係ない。私の尺度は単純で、心が共鳴するか否かのみ。ホームページの『ファドへの誘い』、これは本当にファドの魂を持つ人のみができる表現だと思う。

2006年、かの有名なカルロス・ゴンサルベスがバックを弾くというコンサートの案内を見て、アメリカからチケットを申し込んだところ、一番に来ましたと返信を頂いた。振込先口座を頂戴し、同時に会員申込みもした。すると、当時東京で仕事をしていた息子の住所気付けで、チケットに加え、会報のバックナンバー数十部が分厚い封筒で届いた。日本人が忘れかけている美しい毛筆書きのノートが添えられて。

会報群はすばらしく読み度があり、新しい発見に満ち溢れていた。改めて氷山の大きさを思い知った。カウド・ヴェルデさん達による詞の日本語訳は、それまでポルトガル語を音だけで聴いていた者に別世界を見せてくれた。特に衝撃だったのは、Primaveraだ。あの美しい旋律に、あのような慟哭の詞が流れているとは思ってもよらず、必ずしも好きではなかった曲が、突然、“the fado”と思えるようになったりもした。

その会報が60号を迎えられる。まさに御同慶の至りである。確実に郵便を受け取れる場所を持たぬ故、53号以降拝読していないが、月田秀子さんの、喜び、悲しみ、悩み、栄光と挫折、その足跡の全てが、紙面に現れ、行間に滲んでいると思う。

会報に続いて、ご自身もx年後の還暦をひかえ、新たな人生の展開も考えておられるのだろう。どうか、これからも聴き手・読み手の心を揺り動かし続け、ご自身が納得し、満足される人生を送られますように。

(それが一番難しいことなのです。「土」がそれを教えてくれるような…)

カウド ヴェルデと月田秀子さん

清水茂美(東京)

四人の女性から成るグループ、カウド ヴェルデでは1994年頃から、ファドの歌詞に興味を覚えて、その翻訳に取り組んでいました。ポルトガル語の歌詞が美しい詩になっていて、しかもその内容が日本の歌のとは一味も二味も違い、新鮮で面白かったのです。日本語

の訳も出来るだけ美しい詩にしようと努力していました。

そんな折、97年のことですが、日本に月田秀子というファド歌手がいるという情報が入りました。グループは早速、王子ホールでの彼女のコンサートに出掛けました。初めて日本人ファディスタ月田さんのライブを聴いたのですが、暖かい血の流れる深い歌声に皆魅了されたのでした。

私達はアマリアの曲「暗いはしけ」(Barco Negro)の歌詞を訳して持って行き、コンサート終了後月田さんにお会いして、お渡ししました。そうしましたら、今まで読んだ訳詩の中で一番良いので「ファド通信」に自分が歌う歌の訳詩を載せないかご提案頂きました。カウド ヴェルデは喜んでお引き受けし、98年の1月号より毎号1曲ずつ掲載させて頂きました。

私が海外に2年間住み、日本を留守にし、所用で忙しくしていた間も、ファックスのやり取りなどで工夫して乗り切り、35回載せ続けることが出来ました。

一方、グループでは数年掛かりでアマリア・ロドリゲスの自作詩集「Versos Amália Rodrigues」を翻訳して、2006年秋に「歌いながら人生を」(彩流社)として出版するに至りました。

この訳詩集を、日本では誰よりもアマリアを愛し理解されている月田さんに褒めて頂いて何より心強くまた、嬉しく思いました。

残念なことに、この後に有力メンバーの一人が倒れ翌2007年に急逝しまして、ファド通信への掲載を断念致しました。丁度10年の間続いたこととなります。

訳詩をするとともに、月田さんのコンサートに花束を持って駆けつけたり、私達のグループ主催のコンサートを催したりの楽しい年月を過ごさせて頂き感謝です。思い出深い「ファド通信」終了の報に接し、私達の心はサウダーデに染まります。

今後も日本のファディスタの草分けとして、また、アマリアのファドを受け継ぐ者としての誇りを胸にご活躍を続けられますようお祈り申し上げます。そのためにも呉々もお体に気を付けて下さい。これからもコンサートに伺いますね。アマリアもきっと天国から見守っていると思います。

(ポルトガル語の大きな壁の前で、とかく立ち止ってしまう月田にとって、カウド・ヴェルデの訳詞は、沢山のヒントを与えてくれます。詩の深いところまでたどり着き、しっかりと詩の世界の絵を描くことができるのです。素晴らしい訳詞の数々をありがとうございました。)

畑の中の月田さん

村上京子(東京)

平成14年の秋、山梨県富士吉田市のある喫茶店で、また月田さんのCDを聴きました。ファドも初めて月田さんも初めてなのに、なぜか心が懐かしく、忘れていた海や風の匂いを吸い込んだような気がしました。ああこの人のファドを近くで聴いてみたい、そしてたくさんの人の心も同じように揺さぶってみたい、という思いが強くなり、翌年の5月に、河口湖のアルカンシェールという宿泊施設に月田さんに来て頂き、第一回ファドコンサートを開くことになったのです。当時よりそこはマクロビオティックという自然食のレストランであり、玄米菜食とファドは似合わない、またマイナーなジャンルであると、上司からは反対されましたが、100名は集めずとタンカを斬って、当日は各地から105名のお客様が集まってくださいました。早くもリハーサルの月田さんの歌声とギターの調べを耳にしながら、料理人たちや配膳の女性たちが涙ぐんでいました。吹き抜けの会場は、都留市の藍染めの作家による藍ののれんや日傘の作品で飾り、月明かりと藍と月田さんの歌声とギターと自然食とが、なぜかぴったりハマってしまったのです。以来数年間は高齢のライブとなったのですが、平成21年8月でこの施設をクローズさせてしまい、残念ながらもうあの場所でファドを聴くことはできなくなりました。

私はすでに還暦を迎え、月田さんもそろそろということですが、何よりもいつも美しくお若く、時に少女のような可愛らしさと、時にドキッとするような色気を感じさせる月田さんが、お元気で毎日土や太陽と親しみ、たくさんの野菜を育てている、というお知らせを頂くたびに、私の心ははずみます。かつては、玄米菜食に最も似合わない人と思っていた月田さんが、今や野菜作りに励んでいる、そう思うだけでより一層気持が近付いた様な気がするのです。作物はけっして裏切りません。手をかけて育てれば、必ず実りが訪れます。そう60代は収穫の季節と呼べるかもしれませぬ。

これからも自然からエネルギーを沢山もらって、土と空と風の匂いのするファドを頼みます。

(最後のライブの折、ホロボロになった月田の姿に、このままでは一年も持たないと、施設で真剣に体力を立て直すよう勧めてくださったにも拘らず、無茶を繰り返し、今の病気を発症してしまいました。でも、自然のエネルギーのお蔭で、かなり体力もついてきました。これからは余り無理せず欲張らず生きていきたいと思ひます。今年は大好きなジャガイモを40キロ近く収穫しました。今は夏野菜の収穫、草ひきに汗を流しています。)

いいモンはいいねん

T. S (奈良)

「今度、月田さんのファドコンサートがここであるの、来ない？」昭和54年秋に開店以来、ちょくちょく顔を出していたシャンソニエ・ジルベールベコーの眼鏡をかけたカウンターさんから声をかけられた。「ファドってなに？」小さいときからクラシック専門だった私にとって、ポピュラーの分野ではシャンソンが一杯だった。そこで、ほとんどのヒトがするであろう質問をした。

当日、黒のコスチュームに身を包んだ月田さんが現れた。これが月田さんを拝見した最初。身体相応の野太い声で歌われるファドは、私にとって衝撃だった。こんな切なく寂しい音楽もあるんだ、これがファドを最初に聴いた感想。でも、シャンソンのジャンルでもよく歌われる大好きな「ポルトガルの四月」の原曲が「コインブラ」というファドだと知ったとき、急にファドを身近に感じた。で、ベコーで聴いたファド、月田さんにはすごく悪いけど、瞬時に「ベコーにファドは似合わない」、が感想。

月田さんのファドを聴いてすぐに思い出したのは、ジャン・ギャバン主演の映画「港のマリー」。ファドは、タバコのけむりもうもうの薄暗い酒場が似合う。全身の力が抜け、目もうつろな、生活に疲れ切ったヒトに向かって、しょせん人生なんてこんなもん。あくせくしたってしょうがない。落ちるところまで落ちようよ。でも、死ぬまでには今より少しはマシになろうよ！こう感じさせるのがファドでは？でも、僕に合うかな？と思った。でもでも、少しはまった。以後、ロドリゲスや、ファドと思われるアナベラ、ミージアなどのCDを手に入れた。工作中、いつも流しているクラシックのBGMに、時々ファドが流れるようになった。知人は言う、「なにこれ？こんな曲聴くん？」聴くねん、いいモンはいいねん。月田さん、頑張ってや！

ところで、ひとつだけお願いがあります。ヒトの姿勢は骨格によって決まります。しかし、その骨格を維持しているのは筋です。筋は全身にあります。そして、それらは連携しています。したがって、ある個所の筋機能が異常になると、その影響は全身に及びます。すなわち、どこかで筋のバランスが崩れると、この姿勢を維持するために、通常は使用しなくてよい筋が無理やり働かされます。このことは、連鎖的に全身の筋の

バランスを狂わせます。そして、この状態が長く続くと、当然、筋性の（筋由来の）疾患が発症します。今、月田さんに付きまどっている病気も、そんなことが多少原因しているのではないかと思います。ファドを歌うときの息漏れ防止もかねて、早々に右上の臼歯部に歯を入れて左右の筋群のバランスをとって下さい。

(ベコーで私が歌い始めたのが1980年の初夏。早いものでもう30年前のことになるのです。チーフとして私たち駆け出しの歌い手に慕われていたカウンターさんに私も大いにお世話になりました。いまだに彼女はひとりでやっている小さな居酒屋に私のコンサートのお知らせを貼ってくださっています。表立ちはしませんが変わらぬ彼女の支援に心から感謝です。帝国ホテルの近くにあるそのお店に今年もチャペルコンサートの後にお邪魔する予定です。それと貴重なアドバイスありがとうございます。今年中には3年近く不在だった右上の奥歯3本が入る予定です。おしゃるように入れて健康を取り戻せることを祈っています。)

ラテン音楽、フラメンコ

そしてたどりついたファドの世界

矢島八洲男（東京）

学生時代は新宿などの音楽喫茶に入り浸りでしかも、ラテン音楽の鑑賞をコーヒー一杯で長時間粘ったりしたものでした。そのうち、国内では満足せずメキシコ、ジャマイカ、スペインなどに現地の生の音楽を聴くため日本を脱出したりしました。

40年前、大阪万博の会場で来日していたアマリア・ロドリゲスが歌っている姿を目にしました。今までに聴いたことのない歌声および節回しにしばし呆然となりました。この時が私とファドとの最初の出会いでした。レコードも何枚か集めました。

ある年、旅行会社の主催で招いたポルトガルの歌手が歌った「涙」は私の心を捉えました。映画「過去を持つ愛情」も印象に残る映画でした。ファドの源流を求めてポルトガルへの旅を何度か夢見るうちに生涯にわたる闘病（人工透析）にかかり断念せざるを得ませんでした。今は月田さんの「ファド」を聴く日々です。聴くたびに心をつかむメッセージには感動しています。これからも健康に留意し歌い続けることを心から祈っております。

(旅はできなくなっても「心の旅」をさせてくれるのが「歌」そして「ファド」です。思い出が道連れです。どうかくれぐれもお元気で、また、どこかで心の旅のお供をさせてください。)

お知らせとお願い

大人のための首都圏散策マガジン「散歩の達人」次号（9月下旬発売予定）の“50歳からの音楽地図”でファドがとりあげられます。ライブの様子の取材が9月7日の「マヌエル」であります。最近お客様が少なく寂しいマヌエルですが、東京近辺にお住まいのファンの皆様、ぜひ雰囲気盛り上げてきてください！

「月田秀子ベストアルバム」好評発売中

収録曲目 フアド・メノール、マリア・リシボア、悲しいポルトガル、川辺の民、どんな声で、インシャラー、友は遠く、愛する人へ、汽車は八時に出る、畏れ、コインブラ、難船、老いに寄せるバラード、暗いしげ、涙、大河の一滴 全16曲 ■定価：3,000円

■お申込み方法：下記ファド倶楽部宛てにFAX、TEL、e-mailにてお申し込みください。

〒252-0822 神奈川県藤沢市葛原 1936-1 TEL:0466-47-3860 FAX:0466-47-8891 E-mail:cdonline@fado.jp

月田秀子のスケジュール

【お詫び】9月25日の京都・黒谷「永運院」でのライブは中止になりました。

9月7日(火) 東京・四谷「マヌエル」

8日(水) “サウダーデの夜” Vol. 81

予約・問合せ：tel:03-5276-2432

ライブチャージ：2,800円

開場：18:00

開演：1st.st.20:30~/2nd.st.21:30~

26日(月) 神戸「サロン・ド・あいり」

予約・問合せ：tel:078-241-1898

料金：5,000円（料理・ドリンク付）

開場：18:00 開演：19:00

27日(火) 大阪「帝国ホテルチャペルコンサート」

予約・問合せ：tel:06-6881-4650

受付：18:15 開演：19:00

料金：3,500円

10月 5日(火) 東京・四谷「マヌエル」

6日(水) “サウダーデの夜” Vol. 82

8日(金) 逗子文化プラザ「さざなみホール」

■ゲスト：高柳卓也(Vo)

予約・問合せ：tel:046-873-8081

開場：18:00 開演：19:00

チケット：3,000円

23日(土) 仙台「法運寺」

予約・問合せ：tel:022-256-4905

開場：16:30 開演：17:00

チケット：2,500円（当日3,000円）

24日(日) 秋田「レンタルスペース・ヤマト」

予約・問合せ：tel:018-833-8687

開場 15:30 開演 16:00

チケット：3,500円（当日4,000円）

11月2日(火) 東京・四谷「マヌエル」

“サウダーデの夜” Vol. 83

3日(水・祝) 東京・四谷「マヌエル」

■ “昼下がりのファド” Vol. 3

開場 12:00 開演 13:30

料金：5,000円（ランチ・チャージ込）

6日(土) 長野「小諸ユースホテル」

予約・問合せ：tel:026-723-5732

18日(木) 大阪・南方「三裕の館」

予約・問合せ：tel:06-6304-1745

19日(金) 神戸「サロン・ド・あいり」

20日(土) 京都「日本のきもの+」

会場：京都ブライトンホテル

問合せ：tel:06-6303-2120

21日(日) 金沢「茶房 犀せい」

問合せ：tel:076-232-3210

12月7日(火) 東京・四谷「マヌエル」

8日(水) “サウダーデの夜” Vol. 84

12日(日) 東京・中目黒「GTプラザホール」

■5月大阪でのコンサートで大好評アコーディオンの牧田ゆきさんの「牧田ゆきチャマメクリスマスコンサート」にゲスト出演します。

<編集後記>

すべりひゆに似た草が畑中にはびこっている。去年はなかった草だ。世代交代、世相が変わるように、自然界も変わってゆく。「自力で変える」なんて豪語していた自分が妙に可愛く思える。還暦特集号の未掲載寄稿文が、あと一号分ほどある。デビュー30年目の夏。

目を閉じて ケヤキのうねるは波の音 風は潮風 カラスはかもめ

■編集・発行 月田秀子ファド倶楽部

■神奈川県藤沢市葛原 1936-1 <http://www.fado.jp>